

南京国際平和通信

第 61 号

第 8 回国際ピースウォーク「感謝・南京安全区」開催

11月16日午前、中国・南京で第8回国際ピースウォーク「感謝・南京安全区」イベントが開催された。南京大虐殺生存者の子孫の代表、江蘇省と南京市の赤十字会の代表、ラーベ記念館の職員の代表、ドイツ企業のシーメンス（中国）有限公司と博西家電（中国）有限公司の代表、紫金草ボランティアの代表、南京大学、南京航空航天大学、河海大学など10個の大学の代表が参加した。彼らは一緒に8.7キロメートルを歩き、87年前に南京の難民たちを守った安全区国際委員会のメンバーたちの足跡を自分自身の足で測った。

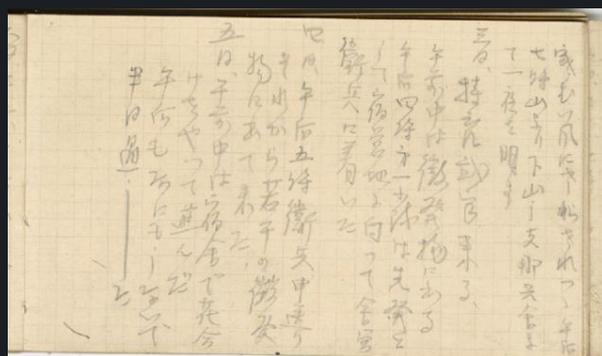
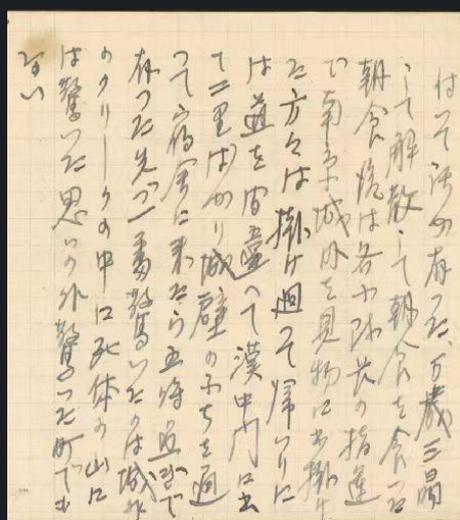
また、当館館長周峰が博西家電（中国）有限公司 CEO 金世峰とともに埋めた「平和の花」紫金草の種に水をあげた。



2024年新資料の発表会を開催

11月29日、当館では2024年に見つけた新資料の発表会を開催した。日本軍第十三師団の兵士である西条栄作の戦時日記や、日本警察庁建築課課長の石井桂「上海南京方面ノ防空施設に就テ」報告書とその資料集、日本軍「慰安婦」制度の写真などの重要な歴史資料を公開した。

西条栄作の戦時日記は1937年9月25日から始まり、1938年1月8日に終わった。日記には、南京に向かう途中、部隊が徴発（略奪）を行ったことを何度も記録している。また、1938年元旦の日に出かけた時、南京漢中門の付近で「クレークの中に死体の山には驚いた」と書いている。



西条戦時日記の一部の内容

「上海南京方面ノ防空施設に就テ」らの資料集は日本警視庁建築課課長の石井桂がまとめたもので、上海から南京までに中国軍の防空用地図、作戦概要、防空サイレンの使用記録などの一次資料を含めている。



今回に見つけた日本軍が南京らの地を侵攻した際の 300 枚以上の写真に、爆撃で破壊した中国人の家屋、土嚢に半分覆われた南京漢中門、占領された南京下関駅など南京の様子を反映する写真も入っている。調べによると、これらの写真は日本軍独立野戦重砲兵第 15 連隊との関係を確認できる。当部隊は 1937 年 9 月 26 日に上海上陸し、南京陥落後の南京大虐殺にも参加した。



アイリス・チャンご逝去 20年 南京の専門家が偲ぶ

11月9日はアイリス・チャンが逝去した20年目の命日、国家記憶と国際平和研究院研究員孫宅巍が文章「私が知っていたアイリスチャン」を書いて彼女を偲んだ。

孫宅巍が文章でアイリス・チャンが南京で生存者調査、史料調査、さらにアメリカで『ラーベ日記』の手がかりを探し、最後に「ザ・レイプ・オブ・南京」を書いて英語圏の社会に南京大虐殺の歴史の真相を伝えた経緯を振り返った。



アイリス・チャン（真中）と南京の学者たちとの記念写真
（左から徐志耕、段月萍、楊夏鳴、孫宅巍、王衛星）

（敬称略、順不同）